

随筆 珍妃の井戸

過日、私は北京を訪れたが、そのとき是非とも見たかったのが故宮(旧紫禁城)の中にある「珍妃の井戸」である。当時撮影した写真を3枚ご覧いただきたい。右の写真の説明板によれば、「珍妃は、光緒帝の寵姫で、光緒帝の変法維新の主張に賛同し支持した。慈禧太后が、戊戌の変法を圧殺した後、光緒帝は、瀛台に拘禁され、珍妃はそのあと冷宮に監禁された。1900年八カ国連合軍が北京に進攻したとき、慈禧は慌てふためいて逃亡し、行く前に宦官の崔玉貴に命じて珍妃を井戸に投げ込み溺死させた。翌年遺体を引き上げ、西直門外に葬り、1913年、清の西陵の崇陵(光緒帝陵)妃園寝に移葬された。後世の人が新たに井戸を作ったが、再び使われることはなかった」とのことである。

右の写真の井戸は、後世の人が作ったものとのことだが、井戸の口が小さく、いかに細身の女性でもつかえてしまいそうな気がする。あまり正確に復元されていないのではなかろうか。また、落下防止のためか鉄の棒が水平に渡されているが、当時このような棒があるわけはなく、当時の情景を思い浮かべることができるのを期待していた私には興ざめであった。

この珍妃の井戸は人気作家浅田次郎の同名の歴史小説により一躍有名になった。珍妃は西太后(慈禧)に殺されたというのが通説であるが、浅田は誰が珍妃を殺したのかは永遠の謎であるとし、7人の関係者を登場させ、珍妃殺害時の状況を



証言させるという筋書きにしている。

高陽著鈴木康隆他訳「西太后第9巻」(1995)によれば、連合軍が北京に攻め込んできた日(資料によれば 1900 年)、紫禁城の寧寿宮に居た西太后は催玉貴を呼んで珍妃を召し出すように言いつけ、自ら景祺閣へ向かい、珍妃に「この非常事態にどうすべきか」と質問した。珍妃は、ちょっと考えてからある策を提言した。西太后は、初めからこの日に珍妃を亡き者にしようと企んでいたもので、素直に珍妃の考えを受け入れようとせず、難問をふっかけ、それに対して珍妃が反抗的な態度を見せたため、西太后は激怒して、珍妃を目の前にある井戸に投げ込むよう催玉貴に命じた。珍妃はかなり抵抗したが、催玉貴に腰を抱えられ、両足から先に井戸に突き落とされ、「ドボン」という音がした。井戸の中から叫び声が聞こえるか聞こえないかのその瞬間に催玉貴は分厚い板で井戸に蓋をしてしまったと言う。

同書の第 7 巻によれば、光緒帝の皇后選びのとき最終的に 5 人の娘が残った。一人は皇后になった葉赫那拉氏で、次の二人は他他拉氏徳馨家の姉妹、最後は他他拉氏長敘家の姉妹であった。長敘家の姉の方が後の瑾妃で当時 15 歳、妹が後の珍妃で当時 13 歳だったという。長敘家の一族郎党は大喜びしただろうが、その 10 年あまりのち、珍妃がこのような残虐な方法で死を賜るとは誰も予想しえなかっただろう。美貌と才気を兼ね備えた妃であったためにそれが命取りになってしまった。これは歴史のひとこまに過ぎないと言ってしまえばそれまでだが、悲劇であることは間違いない。